

【論点】

- [1] 西洋のキリスト教と東洋の仏教の世界観のちがい
- [2] 近代を【 テーゼ 】としたときの、それへの【 アンチテーゼ 】が示されている
親鸞の悪人正機説（ 生者が抱える負債の救済 ）
- [3] 戦後日本の総括（ 天皇制 ）の問題、「総括なしでなし崩し的に戦後をきてしまった」
- [4] 遠藤周作という作家自身の振れ幅（ 狐狸庵先生のユーモア ⇔ シリアス ）
- [5] 戦争の理不尽さ

【物語後半のポイント】

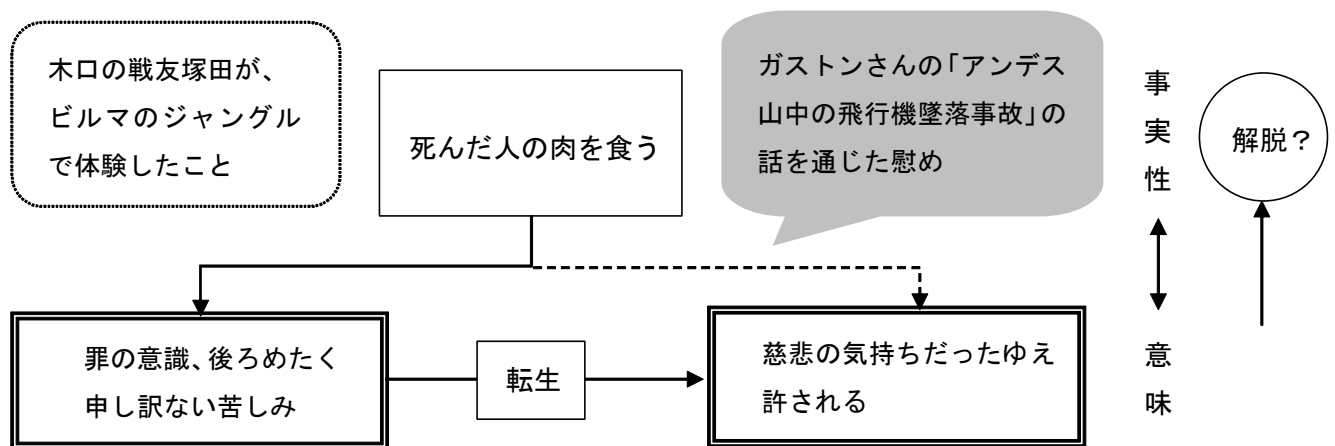
それぞれの登場人物が抱える「穴」が、インドの地で、いかに救済されるのか（あるいはされないのか？）が、描かれていく。そのときキーワードとなるのは「転生」

【転生について】

この転生について劇的なのは、木口が美津子に自分の見た夢を語る部分。

「転生ですか。あのね、私は譚言を言った夜、実はね、こんな夢を見たのです。今でも憶えています。夢のなかで戦友が私の前に苦しそうに現われ、その苦しい戦友をガストンさんが抱きかかえている夢です。ガストンさんと戦友とは背中あわせだと私は思いました。戦友は私を助けるため肉を食うた。肉を食うたのは怖いですが、しかしそれは慈悲の気持ちだったゆえ許されるとガストンさんが言うている夢です」（略）「転生とは、このことじゃないでしょうかね。」（343頁「十二章 転生」）

この部分を以下に図示します。



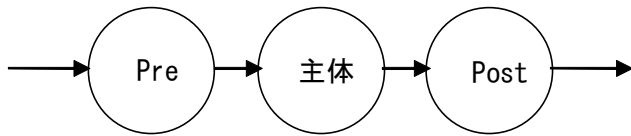
重要なのは、「死んだ人の肉を食ったこと」は同じで、そのこと自体は決して変えることができない出来事なのにもかかわらず、それが、一方で罪の意識を抱かせ、もう一方では戦友の慈悲を感じるといった、いずれのきっかけをも持っていたものとして描かれている、ということです。

（むずかしいのですが）これは「物は言いよう」といったことではないはずです。

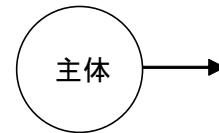
なぜなら、すでに木口は「彼はその苦しみをまったく無視してすべてを裁く日本の「民主主義」や「平和運動」を心の底から憎んだ。」（151頁「五章 木口の場合」）と、憎しみをあらわにしており、そう簡単に「物は言いよう」ですまされるものではないことを骨身に染みて感じていたはずだからです。

むしろ「死んだ人の肉を食って生きている人がいる」という事実性をこそ、浮かび上がらせているといえないでしょうか。そしてこのことは罪の意識といった世俗的な意味の次元を超えて、事実性としての、救済をも見い出させるのではないか。（あるいはこのことをさして、転生からの「解脱」への願いが生じるともいえる）

【 転生の主体のモデル 】



【 転生なき近代の主体のモデル 】



【【論点】 [1] [2] [3] [4] [5]と転生】

[1] 「転生」なき世界(西洋的)と、「転生」のある世界(東洋的)

「ぼくはここの人たちのように善と悪とを、あまりにはっきり区別できません。善のなかにも悪がひそみ、悪のなかにも良いことが潜在していると思います。」 109 頁

[2] 近代は「転生」なき世界

制度に囲い込まれ、世界の豊かさが喪われている。意味が一元化される(資本主義、ジェンダーバイアス)、極限的には、数値化される。

沼田の童話で「村人たちがその工場を訴えたのは、病気の原因を作る廃液を流しただけではなく、祖先や亡くなった両親や親類や兄弟が魚になって生き、やがては彼らもそこに生れかわる次の世を破壊したことだった。」

[3] 思いつきまでですが、作品とは離れますが、ある意味、「天皇制」は転生しているともいえまいか。

[4] 生きながら転生しているとはいえまいか。

[5] まさに戦争がどのような契機で生じたか、そこに「転生」なき世界が膨張していった過程に、戦争の契機がなかったか。

【救済について】

「親の因果が子に報い」という言葉があります。

これも広く転生ととらえれば、もとの親にも親がいるはずで、すると「親の因果が」の部分、実は、親の親(祖父母)からみると、「報い」だったことになります。すなわち「祖父母の因果が親に報い子に報い」となり、この操作はえんえんと遡ることができ、かつ、子々孫々まで繰り延べられます。

私はときどき、自分の祖先にどんなにか大悪党がいたかもしれないと想像することがあります。もちろんそれは想像でしかないですが、可能性としては確かにある。

一方で、自分の子どもには、私の(悪い)因果が、報いないようにしたい、とも願う。この願いは「解脱」への願いまでそう遠くないと思います。ただ、人生一度きりと嘯く輩のようにやや傲慢さを感じます。要するに『深い河』では、「転生」を通じて、登場人物それぞれの人生に流れ込んでいる、さまざまな因果の河の流れを思い出させる（あるいは偽りの転生をたしなめる）ことで、「救済」を描いているのだといえる。

「私」に流れ込み「私」を生かしも殺しもするさまざまな諸経路のネットワーク。